

## 新装版へのまえがき

本書が世に出てから、四半世紀に近い年月が、すでに経過した。これほど長い年月にわたり、多くの方々に読み継いでいただき、しかもこの度は新装版で引き継がれる運びとなり、言葉を失うほど感激している。ひとえに読者諸氏のお陰である。著者はかつて初版の「あとがき」に執筆の動機を記していた。それはすなわち、哲学の入門的な解説をしながら、優れたメルヘン作品が教えてくれる「ものごとの真相」を紹介したいという動機であった。

しかし、採用されたアニメ版ムーミンを読みなおしてみると、半世紀以上も前（昭和）の作品とは思えない点に、あらためて驚かされる。おそらく、アニメ版の各ストーリーに認められる、個性的でありながら時流に左右されない内容・展開の不変性と普遍性が、本書の再版という、著者にとっての幸運をもたらしたのだろう。当初の願いが叶い、感無量である。

もしも読者が上記の特徴をもつムーミン作品のストーリーの一つでも共感できたとすれば、先人たちが解決不可能と思われた諸問題に取り組み、解決への突破口を切り開いてきた哲学の歩みに、読者もまた同行しているのである。そのような共感をもとに、哲学の歴史と歩みを共にしながら、普段とは少し異なる視点に立ってメルヘン作品を味わうことが本書の狙う醍醐味にほかならない。このため、僭越ながら著者としては、本論の各所で解説される哲学的な考え方を、読者が実際に使って、通

常は素通りして終わりがちな疑問を解くように、優れた作品のストーリー展開に分け入る読み方をしていただけるよう期待している。

いうまでもなく、ムーミン・シリーズのなかには、本書で紹介できなかつた多くの深遠な作品が含まれている。たとえば「パパのぼうけん」をはじめ、ムーミンパパが小説の構想に尽力しながら必ず失敗に終わる結末の真相は、おそらく、イギリス経験論の発展全体を視野に収めないかぎり、解明できないのではないかと推察される。奥行きのある作品は、他に「小さなみにくいペット」「さようなら渡り鳥」「メソメソ君のマイホーム」「パパの古い靴」「月夜になる鐘」「鳩は飛ばない」「消えちゃった冬」「さらばムーミン谷」などがあり、いずれも哲学に特徴的な考え方や、難問を解決する道具立て（理論的ツール）によらなければ、隠された素顔をけって現さない。これらの傑作は、深読みするまでもなく、自然に楽しめる内容の作品であるが、細部にこだわる一貫した解釈に努めたときに初めて、比類なく深遠なストーリーの真相を教えてくれるのである。それゆえ、ここで例示した諸作品の読解にむけても、本書が読者にとって何らかの「きっかけ」または参考になれば、誠に幸いである。

なお、再版にあたっては、この度もまた勁草書房の橋本晶子さんに大変お世話になった。末筆となり、恐縮しつつ、感謝の意を表したい。

2024年6月

著者記す

## ま え が き

最近では「哲学が分かる本」といった類いの題名で出版されている本が実に多い。読者の多くは、この種の本を読んで、おそらくは絶望したのではないだろうか。その一方で、分からない面は分からないままである。というのも、分かった内容はどうでもいいような、幼稚なものにすぎないからである。しかし、そのように思えるのは、当然のことである。奇妙な指摘をする点をご容赦いただきたいが、そもそも「哲学が分かる」というのは無意味なことである。これもまた、とてつもなく奇妙な指摘になることを承知のうえで述べると、まともな哲学者のなかで、自分の哲学が分かってもらいたいと望んだ一流の哲学者は一人もいない。そのように思った哲学者は、まず間違いなく三流以下の学者であり、そもそも「何かを真剣に考え学ぶ者」という意味での学者ではない場合が大半である。

ここで問題にしたいのは「哲学が分かる」ということに伴う一種の勘違いにはかならない。唐突な例であるが、大工道具の鉋かんや鑿のみ「が」分かるというのは、いったいどういうことだろうか。たしかに、鉋の艶つややかな表面や鋭い刃、そして鑿の形状や切り込んだ先端部の美しさを説明されると感心する。しかし、鉋にせよ、鑿にせよ、それらが意味をもつのは道具として使用されるときである。一軒の家屋が実際につくられるときに、鉋が使われる様子、そして鑿による仕事つやが柱と敷居を接合させる絶妙な工夫が実演され、それで鉋や鑿がもつ道具としての意味

が実感されるのではないだろうか。つまり、鉋や鑿の意味が分かるということは、それらの使われ方が実感されるということである。このように、鉋や鑿「が」分かるということは、それら自体の形状が分かるというのではなく、それらが使われる現場をイメージして、これはなるほどと思え、また鉋や鑿「で」家屋が見事につくられていくときの納得を意味しているのではなかろうか。鉋や鑿「が」分かるということは、それら自体が分かるということではなく、それら「で」なされることが分かるという意味である。

哲学もまた鉋や鑿と同様で、そのもの「が」分かる場合もあるだろうが、それはあまり問題でなく、哲学「で」何が分かるのかということが問題なのである。この点で、哲学「が」分かる入門書というものは、あまり意味をもたない。少なくとも、入門書であるからには、哲学「で」どのようなことが分かるようになるのかを、事例に即して解説するほかないのではないかと思われる。本書はこうした配慮から、あくまでも哲学「で」分かるようになることを、優れたメルヘン作品が描く固有の実例に即して解説する。つまり、従来の入門書とは違って、本書は初めから終わりまで、哲学「が」分かるようになることを意図してはいない。哲学「で」何がどこまで分かるのか。以下では、まさにこの問題を追求し、一定の回答を具体的に描写する。鉋や鑿で家が建てられる現場を観察するように、哲学で分かるようになる事例を現場感覚で見てもらうこと、まさしくこれが、この入門書の意図にほかならない。

\* \* \*

哲学は今日まで多くの問題を追究してきた。本書はそのなか

から、いくつかのテーマをとりあげて解説している。哲学の問題というと、しばしば言われるように、荒唐無稽で一般の人にとっては分かりにくい。たいていの場合、いったい何をどのような目的で問題にしているのか、まったく不明と思えるほど、哲学の議論は抽象的なものである。しかし、この分かりにくさは、議論が抽象的であることにもまして、それぞれの哲学者が示す見解に、どのような利点があるのかを実感しにくいことによるのではないだろうか。そして、これには一つの理由がある。

偉大な哲学者たちといえども、やはり人の子であり、自分自身の生きた時代がある。かれらは自分たちの時代を生きるなかで、大半の人々が見落としている大問題を発見し、それを解くための困難な探究に挑んでいる。このため、ある哲学者の見解がもつ利点は、かれの生きた時代と当時の問題状況をあらかじめ知っておかないと、第三者には実感しようがない。これは異文化の理解とよく似ていて、特定の文化圏に見られる風俗や習慣などが、外から眺めているだけでは意味不明に映るのと同じである。そして、特定の哲学を勉強するために、歴史や文化まで深く理解し、今日では意味不明な各時代の問題状況や社会情勢まで知っておかなければならないという、まさにこの点に多大な労力が要求されるのである。哲学の難しさは、ほぼこうした事情による。

しかしながら本書の解説は、専門家には不可欠な以上の労力をできるかぎり避け、各哲学者の学説が理解しやすくなるかぎりでの背景説明にとどめる。ただし、各学説が理解しやすくなるような背景説明は、入門書としての水準を考慮しながら、積極的に盛り込むことにした。そして、すでに述べたように、哲学者たちが格闘の末に至りついた見解によると、何がどのよう

に分かるのか、という点に関心をむける。つまり、ともかくも利点を考えてみるところから、それぞれの哲学「で」何が分かるのかを解説するということである。

もちろん、このような方法では、それぞれの哲学者に固有の厳密な議論や、かれらの生きた時代に各学説がもった役割の多くは、視野の外にこぼれ落ちてしまう。とはいえ、哲学者の見解には時代と文化の違いを超えた面があるからこそ、今日までの遺されているともいえる。しかも、時代や文化を超えた哲学の基本的な考え方については、利点を教えてくれる具体的な事例に沿って理解するかぎり、それほど荒唐無稽でも意味不明でもない。むしろ、偉大な哲学者の見解は、わたしたちがあまりにも当然のこととして素通りしている事柄に着目し、まさにその事柄を当然のこととして積極的に押し通すと何が見えてくるのか、逆にまた素通りしているときには何が見えなくなっていたのかを改めて教えてくれる。そして、わたしたちの凝り固まった「ものの見方」や「考え方」を柔軟にする、いわば一種の触媒として働くのである。

たしかに、哲学というものは、即物的な御利益を与えてくれない。これは触媒が働きかける物質なしには何もつくりださないと同様である。しかし、哲学は有効な触媒となって、社会生活のなかでどこか凝り固まってしまった一面的な考え方に作用し、普段は見すごしているものごとの大切な側面を、わたしたちの眼の前に浮かび上がらせてくれる。まずはこのささやかな御利益だけを期待して、本論に備えることにしよう。本論では、哲学の利点を教えてくれる具体的な題材として、ムーミン作品の代表的なストーリーが選ばれる。さまざまな哲学の観点からすると、それらの作品群がどのように読めるのか、そして

常識的な理解とは異なる像がそれらの作品から焦点をむすぶとすれば、焦点をむすんだそれぞれの像から何が分かるのか、また各作品をつうじてわたしたちがどのように学ぶことができるのか、これらを中心に解説することにしたい。これによって、哲学者たちと視点を共有することが、この入門書の目的である。それと同時に本書が、ムーミン作品という優れたメルヘンの深層に迫る、一つの試みとなれば幸いと願っている。

\* \* \*

ところで、ムーミンというと、すでに亡くなったトーベ・ヤンソンの原作が有名である。この原作はかねてより文庫版で容易に入手でき、今でもすぐに読むことができる。トーベ・ヤンソンの原作にはもちろん、優れたメルヘンの世界が、豊富に描き出されている。しかし、かつて放映されたアニメーション版のムーミンは、放映用の作品ということもあって、現在あらためて鑑賞したいと思っても、それはなかなか難しい。そして、アニメーション版は単なる原作の焼き直しではなく、わたしの印象からすると、原作を遥かに凌駕するほどの深い内容をもっていた。

このままあの優れた作品群は、あまり注目されることもなく、やがて忘れ去られてしまうのだろうか。それはあまりにも惜しいことである。このような思いを重ねていたところ、先頃アニメーション版シリーズを取めたビデオに出逢うことができた。もとより、本論で試みるような解釈にとっては、このアニメーション版オリジナルが神聖不可侵の資料となる。このため、ムーミン作品を扱うに際しては、台詞の一言一句に至るまで変更を加えることなく、またストーリーの展開をオリジナルどおり

に再現し、そのものずばりを全面的に解釈する方法が採用されている。というのも、著者の考える哲学の本務は、事柄の加工という企てからはきっぱりと身を引き、事柄が語り示す意味を一定の視角から、それが語られているとおりに見えやすくする試みだからである。しかし、これはあくまでも一定の視角から見えやすくした、一つの解釈にすぎない。一人ひとりが独自にこのシリーズを理解し、それぞれ固有のムーミン像やスナフキン像をもつことは実に望ましいことであり、この作品群が各人の個性豊かな解釈に道を開いているのであれば、それは作品としての優秀さを雄弁に物語る証しだといってよいだろう。

おそらく、アニメ版ムーミンの制作にあられた方々の入念なご努力は、わたしの推測を大幅に超えるものであったにちがいない。その貴重なお仕事に心から敬意を表するとともに、本書で試みた哲学的な解釈が、制作者諸氏の各作品にむけたご熱意をできるだけ損なわないよう、ひたすら願って止まない。

\* \* \*

本書執筆のいきさつは、かなり以前に著者の雑文が、たまたま仏文学者の松原雅典先生の目にふれ、まとまったムーミン論を仕上げてみてはどうかと、同先生からご助言いただいたことに端を発している。そして「これは無意味な評論ではない」というお言葉を賜ることがなければ、本書が執筆されなかったであろうことはまず確実であり、ましてやこうして世に出ることもなかったにちがいない。また、松原先生には、推敲もままならない段階の原稿にお目通しいただいただけではなく、ご多忙中にもかかわらず、数々のご指導とご鞭撻を賜った。この格別なご配慮とご親切に深く感謝したい。

それから、執筆の過程で、妻の美紀に原稿を何度も通読してもらい、読みにくい箇所を徹底的に指摘してもらった。これによって、しばしば抽象論に傾きがちな著者の悪癖は、しっかりとフォローされたのではないかと考えている。身内のことを語る不躰ぶしつけをご容赦いただき、本書は実質的に、この妻との共著であることを記しておきたいと念う。

なお、出版にあたっては、勁草書房の橋本品子さんに、この度もまた大変お世話になった。評論としてのムーミンではなく、著者による哲学解説としてのムーミン論を、ということで、本書の軌道を示して戴いたことが、こうした仕上がりになった最大の要因である。あらためてこの場で、心から感謝の意を表したい。

2002年1月

著者記す